

うものです。、世界規模で仕事（日本発のグローバル化）をし、合理的な議論を世界の場でする人が増えてくればその利益は計り知れません。

学部は4年、大学院は5年、ですが、これが一つのサイクルなのです。資格を与えるだけのことではなく、実力を与える仕事（知識を与えるだけでなく、それを活用する方法）が出来れば教育産業は最も効率のよいものです。オーストラリアの大学のように世界中に分校を作り。世界中に同窓生を作ることも一つの方法です。

2) 第15回定例会の報告

2-1 出席者6名（会員5名） 送付先確認メール（177名）

2-2 中国と韓国の独走振りに付いて説明をしました。

かつて Internet で読むことが出来た、このあたりの資料が今は読めなくなっているようです。

2-3 このようなところに登場するアジア人は、秘伝で生きる国に育って来た人々なのですが、将来どのように世界の標準化に影響を及ぼしていくのか興味があるところです。

2-3 資料として 次の CD を配布しました。

- ① 高橋 あき正著 “漢方の認識” NHK ブックス（平成元年）
- ② 第3回 21世紀漢方フォーラム 漢方の国際医療情報を考える
- ③ WHO traditional medicine (&中国伝統医学)

3) 第16回定例会のお知らせ

バイオテクノロジー標準化支援協会 第16回 定例会

日時 2010年01月22日(金) 午後1時30分—4時0分

参加費：無料

*（定例会は会員でも会員でなくても自由に出席して、自由に発言も出来ます。）

友人同士誘い合わせてご出席ください。出席するのが面倒な方はメールでご意見をお寄せください。

場所 八雲クラブ（ニュー渋谷コーポラス 10 階・1001 号）（首都大学東京同窓会）
前回の出席者の方から会場の場所が分かり難いというコメントがありました。
簡単な見付け方は、まず、“東急ハンズ”と パルコ III を見つけてください。ハンズの 正面から見て左の辻（つまりハンズとパルコ III との間の道）を入るとハンズの商品の搬入口があります。 その搬入口に向かって左側がニュー渋谷コーポラスの入り口です。）地図はホームページ ジャーナルの 10 号に載っています。
住所： 渋谷区宇田川町 12-3
電話番号： 03-3770-2214

話題

“試薬について

—その 1 「ISO Tc 47 は消えていくのか？」

① 1 月、2 月、3 月と試薬関係の標準化のテーマを取り上げたいと思っています。

1 月： ISOTc47 を中心に： 日本が幹事国 化学に聖杯はあるのか？

2 月： 高分子薬品： 塗料 タンパク質薬品(酵素など)(医薬) 核酸医薬 油脂類 炭水化物

3 月： 粒子性薬品： ナノ粒子、クロマト用粒子、触媒粒子 Virus 細菌(細胞)

② 現状について ISO Tc47(専門委員会)は日本が幹事国 Tc47 がこの 20-30 年来見るべき活動を示せなかったため担当幹事国のオランダはその辞退を表明しました。これを受けて ISO の TMB(技術管理評議会)は Tc47 の再構築のため日本(JICST 日本工業標準調査会)に幹事国を割り当てることを決議しました。これを受けて 2000 年 4 月に JICST に TC47 が設置されました。その時引き継いだ ISO 化学規格の廃止事業を行った後、JICST は新しい活動の提案を模索しましたが大きな発展は見られていません。

議長 小山清孝（財団法人日本化学工業会）

幹事 野中玲子（化学標準化センター事務局長代理）

③ ISO Tc47 は P-member: 16、O-member: 45 より構成されていますが 米、英、独、仏などの化学製品の主要生産国は O-member になっていて、積極的な参加はし

ていません。これらの国を再び呼び戻すためには、魅力的な新規業務項目の提案を企画しなければならないということでありましょう。

- ④ ISO Tc 47 で取り上げられてきた化学製品関係の国際標準は長い間手入れをされて居なかったのが陳腐化し、JIS をこれらの ISO 規格に整合化しようとする内容の低レベル化が起こるということでありました。すなわち、ISO 規格を JIS に整合化させなければならないのです。オランダはその費用に耐えられないと見て廃止という選択肢を選んだのではないのでしょうか？（勘繰りすぎでしょうか？担当だった人に逢って真相を聴いてみたいものです。）日本では生化学試薬、臨床検査試薬の標準化が進んでいるのに、日本人はこれを世界に主張しようとはしていません。実務を担当している日本工業標準調査会 標準部会 一般科学技術専門委員会（委員長 川瀬晃）では**生化学試薬**を検討の対象から外しています。
- ⑤ 試薬カタログの項目数は益々大きくなり、internet 化も行われつつあるのに対して。試薬規格の対象は減少するという傾向にあります。このような現象は幾つかの有名大学でも化学科を切り捨てようという動きがあったり、アメリカの化学会がその名称を変えようとした動きがあったりしたこととも相通ずるところがあります。（参照：[化学に聖杯はあるのか？](#)）
- ⑥ なぜ化学に興味がなくなっていくのかということではなくて、化学の新しい領域に対応できなくなりつつあるというべきでしょう。現実には、規格化の参考に行っているメルクインデックスでも ACS でも対応が出来なくなりそうになっています。化学物質はその用途によって 工業薬品 環境物質 試薬、医薬、農薬などに分けています。このような分類では対応できないかもしれませんが、しかし、それを無限と見える仕事で対応できないと片付けては人間の誇りが許さないと思われます。
- ⑥ 今までの化学ではその取り扱いやすさからいって、液体状態の議論が多かったのです。しかし、触媒化学、生物化学などの進展とともに、固形表面での反応を議論することも増えてきました。これも化学のフロンティアの一つです。また、生物も化学システムの一つですからこれも範囲内の筈です。標準化することによって人間の役に立つ領域はまだまだ沢山ありそうです。これらの作業のために現在行っているよう人間が旅行していくようなコンベンション方式では費用がととても足りません。新しいコンピューター方式を模

索すべきではないでしょうか。

4) ホームページに **e-library** のリストがあります。 会員の方はその中から希望のものをご指摘ください。